

## シルクロード (3) ～海のシルクロード

少し前のニュースになりますが、アラビア半島にあるイエメンの海岸で、漁師がマッコウクジラの死骸を解体したところ、腸内から100キロ以上の「龍涎香（りゅうぜんこう、アンバーgris）」が発見され、150万ドル以上の値がついたということがありました。龍涎香はマッコウクジラの腸内にできる結石で、排泄されて海に漂っているものや海岸に打ち寄せられた小型のものが、香水の原料として市場で取引されますが、商業捕鯨が禁止された現代には、このような大型のものが発見されるのは珍しいのだそうです。メルヴィルの小説「白鯨」にも捕獲したマッコウクジラから龍涎香をとるシーンがあります。あの頃の乱獲でクジラは希少動物になってしまいました。

龍涎香のような動物由来の香料は少なく、香料の多くは植物由来です。バラは有名ですね。日本では植物由来の香料というと、お線香などの「香」が一般的です。原料は白檀（びやくだん）、沈香（じんこう）などの熱帯アジア原産の樹木が中心です。奈良の正倉院には、巨大な香木の「黄熟香（おうじゅくこう） \*蘭奢待（らんじゃたい）とも呼ばれる」があり、これまでに数十か所切り取られたようですが、足利義政、織田信長、明治天皇の3人が切り取った跡には記録が残っています。アロマセラピーなどという言葉がありますが、気持ちのよい香りには、人間を大いにリラックスさせる力がありますよね。ちなみに蘭奢待という名称の中には、それが保管されているお寺の名前の「文字」が隠されていますが、わかりますか？



中国とヨーロッパを結ぶシルクロードには、中国から東南アジア、インド、西アジアを経由してヨーロッパに至る「海のシルクロード」もありました (NO. 48 の図を参照)。熱帯アジア原産の香料やコショウのような香辛料が交易され、また中国産の陶磁器など重いものは、陸のシルクロードではなく海路で運ばれました。また悲しいことですが、海のシルクロードを移動した天正の遣欧使節 (1582～1590) の使節記に残されているように、行く先々の寄港地に人身売買された日本人がいたこともわかっています。

少し時代はさかのぼりますが、明の時代には宦官（かんがん）の鄭和（ていわ）が、大艦隊を率いて海のシルクロードを移動して（1405～1430）、セイロン島からアラビア半島のジブチ、そして東アフリカのモガディッシュ（現在のソマリア）まで到達した記録が残っています。（ちなみに鄭和は中国南西部の出身でイスラム教徒でした。NO. 48 で扱ったウイグル族もイスラム教徒です。）明の時代は漢民族が統一王朝として少数派民族を支配した時代で、その帝国の領域拡大を目指した膨張主義的な対外政策がとられました。鄭和は行く先々の国々にその大艦隊の威容をみせつけて、中国に貢物を納める朝貢国にしていきました。明の前の統一王朝である元とそのあとの清は、それぞれモンゴル族や満州族などの少数派民族による征服王朝ですが、やはり国家統一を達成したあとは、膨張主義的な対外政策をとり、元が日本に攻めてきた「元寇」（1274年の文永の役、1281年の弘安の役）は有名ですよ。

20世紀に飛行機の時代になると、海のシルクロードは東アジアからヨーロッパに向かう「南回り」の飛行ルートになります。ソビエト連邦が崩壊してシベリア上空を各国の飛行機が飛べるようになるまでは、アラスカのアンカレジを経由する「北回り」経路と並んで、国際線の飛行機が行きかうところになりました。南回り航路は時間がかかる上に、西アジアなど政情不安な地域を経由するために、ハイジャックや航空機事故などのニュースになることが何度かありました。

さて、中国の「一帯一路」政策が国際的な議論になっています。一帯一路政策は、陸のシルクロード地域＝「一帯」と、海のシルクロード周辺地域＝「一路」を合わせた地域に、中国中心の経済システム世界の構築をめざした政策です。このため、特に中国と東アジアや東南アジアの国々との間で、領海や排他的経済水域をめぐる緊張関係が高まっていますね。南沙諸島、西沙諸島などがそうですし、日本とも尖閣諸島をめぐる問題があります。

そんな中で、12月12日にニューカレドニアで、フランスからの独立の賛否を問う国民投票が行われました。日本では「天国に一番近い島」ということで有名なニューカレドニアですが、ここはニッケルの世界的産地であり、フランスの南太平洋における軍事的戦略拠点です。独立となれば、中国の「一帯一路」政策に飲み込まれるのではないかと推測する人もいましたが、開票の結果、独立は否決されました。

ともあれ、シルクロードは、中国の膨張主義的な外交政策のもとで、再び注目を浴びつつあります。